

出たとこ勝負（92・11・18）

森 毅（昭22・理）

ちょっと体を壊しまして、座ったままで勘弁してほしいんですけど。テレビに出すぎた罰が当たった言うことです。あのオ、ヘルペスでなられた方いますか。あれ、痛いですね。もう一月ぐらいでだいぶ良くなっているんですけど、まだちょっと疼くんです。三高で言うと、小松左京にこの前会ったら、左京は花博でくたびれて、ヘルペスになって三ヶ月間治らなくて12kgやせたとか言うてましたけどね。左京、デブやからね。あれ12kgぐらいやせてもいいですけどね。僕も4・5kgはやせましたけど、この一月で。夜に痛いのと、それから食欲がものすごく無くて、左京に言わすと、「だんだん食欲出てくるけど、食えへんのや」言うてね。「性欲があんのに女が抱けへんような気持ちよ」とか言うてましたけどね。まあだいたいそういう調子なんで。

それからついでにちょっと先程、寮歌祭の話があつたんで、一つ。ちょうど今、対談のゲラが来てて、その中で加藤登起子さんと喋ってるのがあって、その時に寮歌祭の話が出てきてね。琵琶

琶湖周航歌を歌ったら、あれは違うとか言って、今の京大の学生が歌ってるのん。一ぺん本調子を聞かしてやると言うて、三高の同窓会に呼ばれて、ところが、そしたら皆人ごとに歌い方が違って、あれは間違いで俺のを聞けと言って、けんかし合って何か訳がわからんかったという話。

まあ出たとこ勝負っていうのは昔から出たとこ勝負なんで、この間も、この一月から三月までNHKの人間大学というのに出なきやいけなくなつて、それがやっぱりくたびれた一つの原因なんですけど、NHKはかたいんで、テキストをまず作らなきやいけなし、それから何をどう、12回、何をしゃべるか決めないかんという、で、それ拒否したんです。そんなことわかるか、カメラも回さんと、それこそ出たとこ勝負やからわからへんと言つた。そしたら、まずカメラを回して12回撮られてしまいました、せやけどNHKさんが言うには、これアドリブでやったの先生が初めてですか。ともかく時間が来たらやめるといふ方針だけでやると。

この頃はこういうタイマーを持ち歩いてまして、今さっき45分て聞きました。45分は普通短かくて、90分が多いですけどね。60分か90分。45というところにピツとこう押ししましたから、45分経つとピツピツとこう、今、後41分何秒とか出てまして、自動的に終わりが出るといふふうになつてまして、これ、割と便利なんですよ。

だいたい僕の経験では、何か三つ喋ろうと思つて来たりして、で二つで時間が来たら絶対やめた方がよくつて、もう一つ喋つたりするていふのは、喋る側のちよつと大事な話やから時間延ば

しても聞かせてやろうという、喋る側のおごりでね。聞く方は、ぼつぼつ終わるやろう思て期待してますからね。期待裏切ったらいかんわけですよ。だいたいそういう方針で、ともかく時間一杯はお喋りするというだけしか決めてないんです。

まあ大学業界から、この頃放送が多くなったんですけど、あんまり変わらへんですよ。僕はねえ、大学教授も芸能人やという説で、それ実行してましたから。だいたい日本と言えば室町時代とか、ヨーロッパでルネッサンスとか言うんですけど、町に変なおっさんがおつて変なこと言うしおもしろいで、と言って若者が集まって、その話聞きに来るとというのが学者と学生の原型やと思うんです。それが制度化されたというのは、ええことかもわからないですけど、原型は原理的に同じことちゃうかという。たぶん孔子さんもソクラテスさんもそんなもんやったんちゃう。だから別にまあ、お喋りしてたらええのとちゃうという気分なんです。

ちよつとその話しかけたからしますとね。これは三高じゃないですけど、大学にいた頃の先輩でね、学会の講演がものすごうまいやつがいましたね、そいつにコツを教えろ言うて聞いたんです。やっぱりちよつとは人に聞いてもらた方がええから。

これはまあ、ひよつとするとテレビ局に出てからの方が役に立ってんのちゃうか。ポイントは主に二つあるんですけどね。

喋る内容は四割でええね。六割はね、喋ることに聴衆を引き付けたり、周りを整えたり、ノ

リを作るのが六割や。で、それはちょうどテレビに出始めた二十年ぐらい前ですけど、その時にプロデューサーが言うたことと同じなんですけどね。テレビちゅうのは、内容は四割です。六割は絵ですから。それはまた怖いこととして、僕なんか気楽に出てますからね。「あの番組ではなんか森さんムーツとしてたなあ。」とかね、「あの番組、なんかニコニコ楽しそうにしてたなあ。」ちゅうのは、みんなわかるわけです。見られちゃうんですよね、自然に。黙っててもカメラ、勝手に来ますから。しかしひよっとしたら、これ何でもそうちやうかと、学会講演でもそうだといい話。

で、これはね、なんで僕、この頃テレビで使われんねん、言うたら、「ちやうど先生みたいな年格好の、先生みたいなキャラクターが払底してますんで。」言うんですがね、どうい、うキャラクターやろとこう思って考えたんですけどね、この頃そのことで学説してるのはね。たぶん世の中にはね、見せる芸と見られる芸というのがあらんちがうか、見せる芸、見られる芸というのは、一番分り易いのは芸人さんの世界ですね。

僕はちやうど昭和十九年入学、二十二年卒業ですから、大阪へ動員に行ったり、空襲で焼け野原ですよ。あの頃は寮なんかについて、ちよつとヤクザなやつは、さつき話の出た荻原延壽とか力石（定一）とかそ、うのは、なんか東京は焼け野原で人の住むとこちやうで。「おもしろいな、そこ行こか。」言うて焼け跡に憧れた奴が東大来るとい、怪しげな時代であつたんですけどね。

怪しげなことちょっと言いますと、あの頃いい加減やっただんですよ。でも東京に住むとこないんでね、それで京都でゴロゴロ遊んでたんですよ、四月まで。そしたら三高に遊びに行ったら秋月康夫さんにバタツと出会いますよ、それで秋月さんも亡くなりましたけどね、秋月さんのお葬式の時は、僕はあその会場に行った時、僕だけ遅れて来てね、席がなくてしょうがないから後ろで立っていたら、あの秋月さんの写真の顔がね、しゃべり出しまして、「おい森、また遅れてきたんか。後ろで立つとれ。」という幻聴が聞こえるという有様で。それで、手続きちゃんとしたか、と言うたらしてませんと言うてね。あかんぞとか言われて。

それで親父おやじの知合いを頼って知合いの近所の二階へ転がり込んだのが四月ぐらい、いや五月ぐらい。それで四月一杯は行かなかったんですよ、安田講堂の下へ行ったらえらいいい加減で、去年の入学金納めに来たとか、一昨年の授業料を納めに来たとかいうのがごろごろいまして。これは入学金と半年分の授業料納めて損したと思ひましてね。それで、これから納めるのやめようと思つてたんですよ。そしたらね、そのうちに全学連なるものができました、力石なんかが噛んでる。ほんでね、授業料の延納・滞納を認めるとかい運動を始めてね。ほつといて払わなければいいのにね。あれからうるそうなって、家に督促状は来るわ、掲示は出るわ、それで半年ごとに格上がるんですよ、あれ。三年の終り頃はね、別に大きく別格でね。僕だけ大きな字で、「右の者、滞納に付き、……。」というのが大きく書いてあるんですよ。それでも納めなかったで

すけど。デモシカ大学院の頃に免状かなんかの関係で卒業証書があるというんで金策に苦労した記憶があります。

でまあ、そういう怪しげな時代。それよりもその前の三高の頃の方がもっと怪しげな生活を送ってましたけどね。だいたい僕、三高の時代というのは確かにねえ、戦争の最中ですから難儀な時代ですけど、まあやっぱりあの頃にこんなやぐざになったのは、あれ三高のせいや言うてるんですけど、なんか一番なんとなく、あの三年間楽しかったね。いうようなことありますけどね。ほんでさっきの、結局僕は内容よりは全体のノリみたいなものが結構大きいんちゃうかというこ

とで。
あ、そうや、見せる芸・見られる芸の話しようと思ってこんな話になったんや。あんね、空襲で焼けるでしょう、焼け跡の語り口がね、大阪の人と東京の人と違うんです。東京の人は焼夷弾落ちてきた、えらいこっちゃ、言うてね、火に水かけてね、一所懸命奮闘した話。大阪の人はね、もうあかん言うて煙の中逃げ回った話。でこれ、どうせ両方やつとるわけで、大阪の奴かて最初の水かけとんのん、東京のやつかてずっと水かけつばなしやつたら焼け死んでますから、逃げてに決まっとんのん。ところがね、どっち語るかという語り口がちよっと違うんです。それでね、水かける話の方は、たぶん見せる芸でね、上手にやらんと聞いてられへんわけ。芸のある人がしゃべるとおもしろい。ところが逃げ回った話の方は、まあ吉本のノリみたいな言いますか、あー

えらいこっちゃったんや、言うたらね、皆笑ってくれはるといふ気楽さがあるのが見られる芸ですよね。

ぼくは向こうに居ましたから、五代目松鶴のおっかけしてまして、そう言えばさっきの話でいと、ちょうど焼け跡の四つ橋の文楽座で松鶴の『人形かい』を聞いて帰って来たら、友達から東大に合格したという電報が来てたというよき思い出がありますから、松鶴のおっかけしてたんですけど。もっと世間でよく通っている東京の噺家さんというね、文楽さんというのは、あれ、芸の修業で聞かれますから、最後、くたびれると引退するという次第。それで、志ん生さんというのは若い頃、一所懸命見せようとした時はあんまりダメで、年とって、酔っぱらってふらふらしてるだけで見られる芸で、何か人気があると。

若い時はやっぱり見せようとするんですかね。僕辺り二十代、三十代、結構人に見せよう思つて頑張つてましたけど。せやけど、まあまあ考えてみたら、年とつたら見られるぐらいの方がええで。その代わり、見せる芸の方は何を見せるか選べますけど、見られる方は丸ごと見られんねんけど、もうこの年になつたら何を見ようが勝手にせえというような気分で、もう丸ごと見られるという感じになりましたね。それで、もう行き当たりばったりであるというのでやっちゃう。で、たぶんそういう所がね、だいたい見られる芸の方がええのんちゃうか、という気がする。

これは、次のもう一つのポイントに関わるんですけどね、その先輩が言うのにな、数学の話や

めて一般論にしていますとね、一所懸命苦心して分かって、大事なことで、これ何とかみんなにも伝えたいなあと言って何か難しいことを頑張るから、いかんのやと。難しいことはあつさりとやれ。それでね、易しいことはね、こんな易しいことやし分かり切ってるしと思つたらいかんで、くどくやつたらいかんけどそこをじっくりやるのがコツやと。難しいことはあつさりと、易しいことはじっくりと。

これは難しいことをやめとこいうのやないんですね。それは相手を見くびることになるからいかんし、チラツと難しいことも言わんとスパイス効かないですから、チラツと言うたらええんですけど、分かるか分からんか、それはおたくに任しとこうとってそのためにノリが必要なんですけど、そういうノリがあれば楽しんで聞いてくれはるやろうと、相手を尊重した方がええのちやうとという感じね。何とかわからそう思つて頑張れば頑張るほどね、これ分からんといかんのか、いうてプレッシャー感じたりするんですね。

ほんでテレビで、これ僕はちよつと感じたんすけどね。だいたいこれもね、関西のテレビとね関東のテレビと、ちよつと感じが違うんですね。関西のテレビはね、どっちか言うたら、なんかいろんなビデオなんか見ながらもね、勝手にね、もうステージの中でワイワイワイ言うてね、ちゃかしてアホやなあとか言うてね、喜んで遊んでるという感じでね。関東のテレビの方は情報たくさんちゃんと聞いてね、聞いたあとでけしからん言うて怒つてるという。怒つてるより

笑う方が幸福やで、言うてるんですけどね。

まあその時に意見言う人でがんばって言う人いるんですよ、これなんとか相手に伝えようって。ぼくなんか、あんなガンガン自分の意見、一所懸命言うたはる人の聞くと、まあ熱意わかるけどそんながんばらしたらしんどいかな、言うてチャンネル変えますわ。だから、チラッとこ言うて、あと勝手に考えて、いう方が楽でいいし、ほんでその方が相手尊重してることになるし、その分だけしかし、ノリをどう作るかというのは難しいんで。

ノリちゅうのは、これもちよつともう一つ言いますと、同僚でね、キノコの専門家がいましたね、それに聞いた話で好きな話がありました。これも話せば一時間ぐらいのネタなんですけど、今の要点だけチラッと言いますとね、キクイムシという虫がいますよね。だいたい木の繊維は消化悪から消化できるのはバクテリアとか、アメーバみたいなもとかカビの類じゃないんですよ。だからみんな葉っぱなんか食うのは、人間もそうですけど、腸の中にいろんなもの飼うたりしてるわけです。キクイムシっていうのはね、木に穴開けるけど消化できないんですって、木の繊維。いたずらに穴開けとるだけ、で、単にすき間を作とるだけ。それでなんのええことがある言うたら、すき間にね、キノコのカビが生えて、キノコのカビが木を消化してくれるんです。僕は子供の頃からね、ひよつとしたら三高のある部分ちやうかというのは、あんまりね、突っ張んの苦手なんですわ。主体性とか自己はなんとか、とかいふのかなわんです。アイデンティ

ティとか。それでね、中学校ぐらいからもそうですけどね、学校の先生が自分の考えをしっかりと持てとかね、自分の考えをしっかりと人に伝えろと言われるとね、自分の考えなんてその場で生まれるもんやしというような気分があるんですよ。

これはね、ひよっとするとね、ちょうど日本かぶれしとった時代ですけどね、主として江戸かぶれしたのは戦後なんですけど。戦争中はね、宝塚文化の中にいて、フランスかぶれとアメリカかぶれしてたんですけど、フランスかぶれ・アメリカかぶれの方は、先輩の方が教養ありますし、こらあ、がんばらんと負けるし、若い子はどんどん新しいセンスでやりよるし、なんぞ穴場ないかなど。割とインテリが少のうてかっこええのはなんかという江戸や、とこういうて僕は江戸狂いしましてね、ところが当時はものすごい江戸狂いしたんですけど、そのためにね、どうも江戸風なところがあるんですよ。

最近、書評なんかでニューアカ風て言いますか、ドウルーズとかの難しげなね、フランス辺りの思想家の対談本なんか読むとね、やっぱりフランス辺りの文化は主体性の文化ですね。がんばらるるわけです、一所懸命。で、あんまりおもしろくないです。それぞれに意見を開陳し合っているというふうな感じで。シンポジウムなんか、だいたいそういうの、あんまりおもしろくないですね。それぞれの人が、インタビュアーなんかでも日本のインタビュアーとフランスのインタビュアー、明らかに違いますね。

僕、インタビュもしたことありますけど、磯田一郎さんとこへ、大学のことでインタビューさせられたことありますけどね、先輩のツテをたどって行きましたけども、そういうのはむしろ少なく、インタビュするよりされる側が多いんですけど。よくあるのは対談のホストなんです。対談のホストっていうのは、ジレンマなんです。ゲストのことを勉強すれば勉強するほど、いろいろ引き出せる内容は多いはずで、やっぱりいくらか勉強するわけです。三高関係では、最近では梅棹忠夫さんゲストでしゃべりましたけども、なんかいろいろ読んだりすると読者から遠くなる。読者とゲストの間でね、なんかゲストの弟子みたいにしてね、読者に予習を強制しかねない。で、日本の場合はもうちょっと読者寄りなんです。

これはひよっとしたらね、江戸時代の連の伝統みたいなもんですね。こういう仲間でワーワー言うて、相手によって言うことちごたってかまへんし、それぞれちごても良くって、その場が生み出すものが場の文化としてのオリジナリティーだというのが江戸文化ですからね、言わば。どうも僕はそれが身につけてる感じがありません、僕が寮なんかには戦後やったり、戦争中もちよっといましたけど、寮というのはそんな感じじゃったですよ。なんか、誰かが何してんのかよう分らへんけど、なんとなくその場が文化を生み出してに過ぎない。

この頃の学生さん見ると、自己っていうのが強迫観念みたいになって、自己表現をどうするか、自己確立をどうするか、自己実現がどうのこうのってうるそうてしゃあないですからね。ジ

コジコ言うな、それがお前の自己や、言うてるんですけれどね。人と人とのつながりの中で勝手にこうできてるものが自己で、まず世界を閉じてそういう自己があるというのは幻想ちゃうかという気が僕はしてるんです。

ほんで、これ両方あるんですけれどね、あるフォーラムでコピーライターの糸井重里が言い出して、ものすごい受けまして、大学へ戻ってきてしゃべってもものすごい受けた話なんですけれど、集中力が大事大事言うけど、分散力が大事ちゃうかとかいう話になりました。

集中っていうのは、いわば世界を閉じることによってパワーを出す。ところが世界を閉じてパワーを出したら必ず突破できるて限らないで、いつか世界を開いてふわぁーとなんか、ふらふらしているとこがないと、新しいアイデアなんか出てこないですね。ほんで世界を開くことと世界を閉じることが、両方バランスとれてんのがええのちゃうと。

ぼくは実は、三高で迷惑したことのひとつはですね、とかく三高時代に世界を開く癖がつきすぎまして、20代・30代の時は、お前はもうちょっときっちり自分の世界をやれとかいうプレッシャー感じたんですけれどね。ところが40過ぎますと、これ得ですね。だんだん世界が開いてきまして、ほんで今はものすごい得なのは、まあ大学の商売がありましたけど、それ以外に講演とか、それからエッセイなんかは、まあきりないですから、この頃はむしろ押さえるようにしてますけれど。大学いた時は隙間で適当にしてたんですけど、考えてみたら全部隙間ですから、それ全部引き受

けたらえらいことになる。そやけどまあ、講演とかエッセイとかよく書いてまして、増えたのは今のテレビ関係とか放送の関係と、前もありましたけどそれはうんと増えまして、それからインタビューというのが増えた。

インタビューというのもおもしろくてですね、初めインタビューされんのあんまり好きやなかったんです。やっぱり自分で書いて自分の考えをかつち書くという、自分の世界を閉じて見せるという方が、好みやった。ところが、インタビューであれ、またおもしろいもんですわ。初めてね、テープレコーダーで自分の声聞いた時、「あ、なんて俺、柄の悪い声してるんやろ」と思うでしょ。初めてビデオで自分の姿見た時、「なんちゅうだらしないかつこ、しとんにや、」と思うわけですけどね。それがそやから、しゃあないんです。インタビューというのは、インタビューアの頭の中にあるもんで、もつと言えば自己というのはそういう人と人とのネットワークの中にあるもんで、自分の思い込んでる閉じた自己なんていうのは、それなりにやっぱりそれもいいですけどね、それも同時にありますけど、それと違う所がおもしろいという気がしまして、この頃、インタビューによって、このインタビューア、俺をこういうふうに捉えてるかという、それがいろいろあるところは逆に楽しみになりましたね。

この間も新聞でコメントなんか求められた時の、コメントについてのコメントというのを聞かれました、おかしかったのは、曾野綾子さんと僕反対で、曾野綾子さんは物書きだからコメント

はしたくない。自分の意見は自分の字で書きたい、自分の世界としてありたいという。僕はどうも逆のと言いまして、人間というのは、どうせ皆の誤解の中でできてんにやしなあとか言うてね。皆の中でできてんにやからええのやとか言う、なんかホワァーとした方で、今のどうも僕は見られる側というのが割に性に合つとるわけです。

ちなみに、コラムなんかにつきましてはね、これは前から書いてたんですけど、コラムなんか書くのは、まあ余技ですし、と言う人がいます。私の本業は、さっきのけじめつけてまして、本業は研究と教育で、とか言うて、あれはねえ失礼な話やと思うんですよ。まず、読者に失礼でしょ。それからコラムニスト本業にしてる人に失礼でしょ。だから余技ちゆうことはないんちやう。そしたらまた数学の教授が社会を文化を論じてとか言う人もいるんですけど。社会学の教授や政治学の教授でなんぼのもんや思ってますからね。コラム書く時はただのコラムニスト、テレビのコメンテーター、ただのコメンテーターで、その時におもしろいこと言うかだけが勝負やでという、そういうのあんまり気にするのいやなんです。

そうするとね、今のインタビュートか、テレビなんかの仕事が増えて、あと講演やエッセイ。コラムの類は同じことですから、考えてみたら大学と合わせたら五足の草鞋を履いてまして、一足脱いじやったけどあと四つあるしなあとかいう。それで、テレビなんかも増えたしと言って、割と気楽に暮らしてます。これはええ暮らし方や、思てね。

それで、「これ一筋」というのを、ええ、というふうに皆さん、集中の方だけ言いますけど、集中と分散は両方いるんです。確かに僕は20代、30代の時はもうちょっと集中せえ、言われてましたけど。だけど、あの分散を学んだんは三高のせいちゃうかという気も多少ありまして、割と気楽なんです。気楽やからしかし、いろいろなとこへひっぱり出されましてね。

京都がらみで言うと、この間NHKでラジオで京都特集というのがあって、そこへ引っぱり出されました。それからこの二十何日だかハイビジョンの実験放送で京都の話とか。ちょっと京都の話しますけどね、僕は生まれ東京ですけど、育ち大阪ですから京都ではやっぱりよそ者なんです。京都育ちの方、おられるかもわかんないですけど、まあよそ者の話なんですけどね、考えてみたら、三高の寮なんかにおける奴は大部分よそ者で、それが大きな格好してるんですよ。もともと三高とか京大とか川の東は京都の外ですからね。だから、その昔の京都文化人の人達だったて、桑原武夫さんだって、湯川秀樹さんだって、松田道雄さんだって、せいぜい二代目ぐらいですからねえ。本来の京都人ちゃうんで、よそ者が適当にワーワー言うて楽しんで京都作ってきたんやで言うて、京都は割にね、よそ者に対して優しい町ちゃうかという気がするんです。僕好きなんです。

ただねえ、これはいつも考えてるんですけど、大学教授長いことしてて、何考えてたか言うたら、自分の意見と同じこと書いてる、できの悪いレポートより、自分と違う意見を書いたできの

いいレポートには必ずいい点をやるということだけを考えた。うっかりすると、できがそれほどよくなくっても、俺とだいたい意見ちやうなあ、おもしろいなあと言つて点を甘くするという悪い癖もあつたんですけれど、いろいろある方がおもしろいですしね。

中に自分と同じ意見を喜ぶ人ちゆうのは僕わかんないんで、そんなあんまり得にならへんですからね。運動してる人なんかでよく、自分と同じ意見の人とばかりやつて、安心し合うちゆうのはつまらなと思うんで、だいいち、違う意見の人で、それを支持する人もいるんなら、それはどうしてか言うて分析した方が運動にも絶対役に立ちますし。

これも三高の時の癖がありまして結構18世紀とか19世紀のいろんな偉い人の本、今でも読む癖あるんですけどね、今考えたら、特定人言わへんですけど、皆嘘ばかり言うてますよね、お偉い人は。今読んでね、当り前のことしか言うてへんような奴はだいたい偉うないんです。だから、偉い奴は嘘言いよるんです。結構。せやけど、内容がおかしいから偉くないか言うたら別でして、自分のために思たら、結論はちごても自分の考えにプラスになんのは、そういう人の言うた嘘の方がいいですよ。だから、偉い人というのは必ず自分の為になりますよね。結論ちごても。あれねえ、意見が違うから言うてはつたら損や思いますし。ただ危ないのは偉い人やからつい、つられて、だまされて嘘の事を本当と信じることは危ないですけど。

せやけど、そこらへんも、何となく三高の時の癖かも分らないですけど、だいたい先輩とか先

生とかを一切尊敬しない癖というのは三高の時に生まれたんちゃうか、と。それでまあ、それから自分にいろいろ学んだら得ちゃうか、という気がしましてね、何でもそうする癖がある。それでまあ数学やりましたけど、数学の癖というのも多少ありますがね。

さっき言いましたようにね、三高の三年間一番楽しかったんですけどね、それだけにね、ちょっとかなわんなーという所あるんです。僕もようしますけどね、この頃昔話うれしくて。で、僕らが若い頃に三高に居た頃ぐらいにね、近所に日露戦争の話をしてくれはったおじいさんがいますよね。あれもね、上手い人の話聞いたら、ものすごーおもしろいんですよ。下手な人はあかんですけど。ほんでね、ところが、あのおじいさんがね、僕らと同じぐらいつ若かった時代というのは、全然想像できないんですね。今の若い子にね、40年も前の話しても同じことやと思うんですよ、やっぱり。これは昔話としての芸でしゃべるもんやと。これはまあ、昔話はさっきの見せる芸ですから、芸がないと駄目ですけどね。そういう感じなんです。で、あんまりねえ、それにこだわるのは僕はちよつと、何となく思い入れがあるだけにね、気が引けるんです。

それで、京都で例えば、環境問題とか何とか、よう本あるんですけど、あの時ね、確かに僕はあの時代、一番楽しかったし、あの時代の京都つてもものすごー思い入れがありますけどね。思い入れがあるだけに距離を置きたい気分。僕はね、自分で考えているのはだいたいね、過去は100年以上昔のことを考える。未来は100年以上先のことを考える。なぜかという、50年前だと自分の若い

頃のノスタルジーで我が身にひっかかっちゃって、一般性を離れてしまうんじゃないか。それから、50年以内だと子供や孫とかが生きていますから、思い入れがあつて悪いんちゃうかと。だから、両方とも100年以上にしたいという考え。

で、僕は京都の割に好きなのは、そういう歴史というか、町のもっと古い町の地霊じれいというか、何かがあつてね。で、また入り交じつてるんですよ、あれ結構ね。何かふらふら町歩くと、あーこのお寺300年前かと思うとね、しばらく歩くと500年前のお寺がある。何や200年しか経つてへんにやというような気になりますよ、100年や200年、何ぼのもんやという気分にだいたひなりますよね。ほんで、あれ、僕はだいたい好きなんです。まあそれから、古いお寺の、年とつたぼんさんがそこら辺掃いたりしてて、その横に3年ぐらい前にできたような何かきらきらのブティックかなんかあつて、その若いギャルとお坊さんが仲よう喋つてるといふあの風情ね、それで僕は、伝統つていふのはね、古い物を維持する力ではなくて新しいものをのみ込める力やないかと。これは物事ちゆうのは維持と新しくなるのが両方がうまくバランスせないかんわけで、川だつて新しい水が入り込まんかったらよどんでしまいますし、全部新しくしたら別の川になっちゃう。伝統の力というのはどんだん新しいものを入れることやないかと。

例えば、祇園祭の取材で関係したタペストリーですね、あれはね、応仁の乱の頃がどうかで、町衆とか言いますけど、ほとんど18世紀なんです。で、鎖国中なものすごい南蛮主義なん

です。で、当時の新しいヨーロッパとかインドとか近東とかのものが入り込んでくる。であれ、^{ひんしゅく}聲響こうとったと思うんです。けつたいなもんやいうて。その気分で言うたらね、明治以降むしろ止まってましてね。まああの時の気分、僕流に再現しますと、例えば、ゲルニカ山という山があつて、そこにはレプリカですけど、ピカソのゲルニカのタペストリーがあつて、祇園囃子にカクスクリーンが入るとかね。それからモンロー山という山があつて、アンダーウオーホールのシルシコのタペストリーとかアフリカのタペストリーが入るっていうのがあの時の気分です。

その意味ではね、伝統の力はひよつとしたら衰えているわけです。で、これは僕かっこいいコピー作つたことありましてね。茶室だから和服でなければならぬなんていうのは伝統ではない、と。ジーンズでもサマになるところが伝統の力だ、というちよつとかっこええのん、つくつたんですけどね。何か新しいもんでもそこでサマにしちゃうというのが京都のよさだという。僕はいつか、まだ大学にいた頃ですけど、ついつい何でも引き受けちゃうんで、町並みを保存する会、全国集会で記念講演をやつてという。そしたら同じ頃に、京都の再開発を考える会の記念講演をやつてという、で両方やつてしまった。それで両方やつた時には別に変わったこと言つてゐるわけやないですけどね。

僕は御所とかあると遠回りせんならんし邪魔やなーと思うことが多いし、知恩院とか本願寺と

か大きな場所取りよつてと思ひますしね。考えてみたら、知恩院は一度ぐらい除夜の鐘聞きに行つたことがあるだけで、西本願寺は一度お能を見に行つたことがあるだけで、何の役にも立つてへんでーと思うんですけどね。あれを例えば公園にしたら絶対ひどいことになる。人間の計画というのは、そんなに上手いこといくもんやないですよ。

これもこないだ聞いてへーなるほどと思つておもしろいなーと思つたんですけど、京都の計画作つた人は皆、よそもんです。最初、桓武天皇でしょ、それから平清盛は、ま、三世ぐらいですね、伊勢平氏の。足利尊氏から義満ぐらいにかけて、あれなんか関東もんでしょ。それから愛知のどん百姓の豊臣秀吉でしょ。なんか皆、よその奴がかつてに計画立てた。だから、計画通り全然いつてへんやないですか。最初の京都は、真中いうたら朱雀大路の辺ですかね、羅生門の。全部東にかたよつてますよね。ほんで、だいたい計画なんて思う通りいかへんし、人間の計画なんてそんなにやつてもうまいこといかへんし、歴史の中で何とかなつていくもんやでというのが計画開発派に対する言い分。

せやけど逆に言うたら、八坂の塔なんか大好きですけど、あんなものねえ、東山の緑の中にと建てたら、迷惑やつたに決まっていますよ。だいたい、今ある京都のお寺、清水の舞台かてせつかくの谷にね、あんなもん作りよつて音羽の滝がある所にかいうようなもんですしね。もつとひどいなと思うのは、インクラインですよ。あの南禅寺のええとこや、あんなもんつくつてと

いう。そやけど100年ぐらい経つとそれがええなーちゆうて、こう名所になるんですよ。

これも前、ラジオ放送の時間にお話ししたりしてましたけど、今、町並み保存で三条通りの洋館建築を保存したい、あれええんですよ、雰囲気。あれ、建てた時はひどかったで。それこそ京都の町並に洋館なんてなんにもないところですよ。そこへいきなりエイリアンみたいの建てるわけですからね。僕はチンチン電車が好きやったから、チンチン電車失くす時に反対署名しましたけど。考えてみたら、あれ、雨が入り込んで迷惑やったでという思い出しかなくってですね。静かな京都の町に、あんなチンチン電車みたいな通した時はどんだけ迷惑やったろうと。

だからね、これは歴史というものはそういうもんで、だんだんとそれによって、これこそ京都の伝統、歴史の力によってしっくりしてくるもんで、それでやれ、歴史的文化財・宗教的建築や言うてお寺さん、よう言いよるけど、あれ歴史の慈悲によってかっこついてんのに、歴史の慈悲を知らんで何が宗教やて悪口言つて、建設計画と宗教家の両方の悪口を言つと、それぞれ反対派の悪口を言われたと言つて喜ぶという、なんか、そういう構造しとるんです。

だいたい僕はね、こう距離感とつて考えるの好きなんですよ。京都千二百年で言いますけどね、最近この頃、ちよつとひんしゆく買つてんのはね、こらもう二十一世紀は、多民族国家になるでー言うて、それもうしゃあないでー言うて。こないだ、夏頃、オリンピックのテレビ見てまして、だいたいカナダやアメリカはもちろんのことね、フランスやイギリスでも、陸上競技いうたら、

皆、黒人、走つとるでしよ。サミットに出る国で、何で日本だけ黒人走ってくれへんのいうてね。考えてみたら僕らのちよつと後の時代ですけど、黒人随分出てるんですよ。基地があったしね。あれを日本人にようしいへんかったん。あれ、ちゃんね、日本人にしといたら、金メダル一つぐらい増えるで、言うてね。ほんでね、黒い肌に日の丸ちゅうのも粹やないの。

考えてみたら、京都の千二百年前言うたら、松尾さんもお稻荷さんも秦氏の神さんで、朝鮮系の渡来人の町で、だいたい千年ぐらい前に百済系の人みんな日本名に変わって、これでみんな日本人になりましたよ言うてね、ちよつと仮名文字の国風文化作った、日本文化作ったでしよ。まあ、その頃のこと考えたらこれ、どどん異文化、異国人をどどん取り入れてきた町ですよね。

こないだ誰かに聞いて、へえーっと思っただんですけど、京都の町はね、外国人と日本人のカップルが多いんですってね。町を歩いててね、仲良うして。確かにね、ヨーロッパとかアフリカとかアジアなんかの若い外国人が、結構、京大の付近に住んでますからね。割に楽しげに暮してるんです。こないだ梅棹さんときゃべった時に話題になったんですけど、三高の時代、結構朝鮮の人とか、南米の人もいましたし。こないだも小松左京と一緒に言うて、ペルーから来た人の話が話題になりましたけどね、三高の。ほんでそういう種類の外国人が結構いて、結構仲良うしてたという。ほんでむしろ、戦後の方が窮屈になってんのかもわからへんですね。さっきの南蛮渡

来もありますし、それから五百年ぐらい前のお寺なんか中国人の寺だらけですしね。だからどんなに入れたらどや、言うてね。

こないだアメリカ大統領でブッシュが英語のできないアメリカ人が増えて困るという、政策で負けよつたですけどね、だけど僕はアメリカはねえ、ワスプのアメリカっていうのは二十世紀の半ばが絶頂期で、今は下り坂になって、このままいくと二十一世紀はジリ貧になると思う。絶対値は日本より高いですけどね、匂配から言うところ、ところがアメリカは一つ希望があつてですね、ラテンアメリカの文化的潜在力があるすごう高い。これは非常に独断的で三高文化主義かもわからないですけど、文学とか音楽とか絵画とかで、何となくええもん出しとるやつは、やっぱり潜在力があるにやでという気分が有まして、ほんでラテンアメリカのヒスパニック文化がね、アメリカと融合するというのが21世紀のアメリカの希望ちゃうかということですね。

それに対応するのは日本で言うたらね、日本は今、昇り坂ですけど、このまま二十一世紀いっぱい持つとは限らないですから、アジア系の日本人をどれだけ作れるかがポイントちゃうか。で僕らの、皆さんもそうですけど結構いましたよ、いろんなアジア系の人。で、仲良くしてましたよ。京都はむしろ、そういう伝統があるところやから、それ再生したらどうやと。で、ただ労働力が足らんとか賃金が安いだけで考えんのはもったいないんちゃうかとね。例えば、イラン系の人なんていうのはね、日本に来て、ひと稼ぎしようという根性だけで見上げたもんですよ。

で、結構、本国では文化水準高い人が来てますよね。で、日本語できひんから、いろんな仕事してらんです。あれ、うまいこと日本に定着させてね、イラン系日本人三代目ぐらい作ったらええのちゃう。この頃、子供をあんまり産まへんていうけど、あんな心配いらんで、言うて。イラン系の日本人やタイ系の日本人どんどん作って、それに養ってもらおうという話でね。で、これ千年ぐらい考えたとそういう気分ですよ。

もっと先、考える手もあるんですけどね。これは、もっとすごいのはですね、一万年、いや一万年よりもっと一番すごいのは、サルやってる人ですよ。サルやってる人はね、スケールが百万年、で、日本は米、何言うてんねん。米なんてまだ二千年しか経ってへんやんか、もともとどっか照葉樹林帯のどこやから来て、それから、どんどん流れていつとるんやとかいう気分になる。もっとすごいのはね、だいたい百万年の中に農業や牧畜やってんのは一万年やで、言うてね。もともとは狩猟・採集やと。これは人類学の人に聞くと、現在いる狩猟民族というイメージは、あれ、間違ったもんらしいですね。あれはヨーロッパの貴族が作ったもので、現在生きてる狩猟・採集民族というのは、基本形は採集なんですって。木の根堀ったり、どんぐり拾ったりして暮らしてわけ。ところがね、時たま、お祭りしようかあ、言うてね、鹿捕りに行こか言うて行くのが狩猟なんです。あれ。だから、割にゆったりそういうのやっとなるんです。

もともとね、おサルさんはね、百万年よりもう一つ前ですけど、だいたい森の中に住んでます

からね。森ちゆうのはね、空見えへんのですわ、あれ。木が茂つとつて。で、地面はなんやら苔とかなんとかばっかりしか生えてへんのですよね。ああいうとこで、長いこと暮らした奴がね、何となくサバンナに出てきてね、やれ、見晴らしがええわとかね、青い空、緑の大地なんて言うのはね、あれサバンナ・コンプレックスやで言うて。だから、僕は景観っていうのは、そんなに頑張らんでもええやないのという気分がありましたね。それでつい、なまくらな調子で京都の話でもしちやつて、京都の人にはいくらかひんしゆく買ったりもするんですけど。

やっぱり京都の三高の思い出から言うて、そういうなんか新しいものはどんどん新しいものになるんやけど、全部新しいせんでもええし、それから昔からの伝統の中にうまいこと溶け込ますというんで、まああれもあり、これもあり、何でもありやという世界でね。京都の町の気分自身が、僕はそれが好きでして、歴史の古いものも新しいものもクロスオーバーし、それから、いろんな時代がいろいろ入り混じりしてて、こういうややこしいんですけど、あ、ピッピッ言うた、結構楽しいというええ加減な人間になったのは、これは三高のせいではないかというところであります。

(京都大学名誉教授)